



書評

[評者]

本田 仁

東京都立多摩総合医療センター感染症科

熱、諍い、ダイヤモンド

Paul Farmer 著
岩田 健太郎 訳

●A5変 頁564 2022年3月
定価：4,950円(本体4,500円+税10%)
[ISBN978-4-8157-3044-4] MEDSi 刊



この書籍は西アフリカで起こったエボラウイルス病(EVD)アウトブレイクの歴史書です。前半はEVDのナラティブレビュー、中盤は西アフリカの歴史、政治とエボラウイルス感染症のアウトブレイク発生の関係、さらには本の題名にもなっている、諍いとダイヤモンドとEVD(熱)との関係、終盤はシエラレオネの現状やEVDについての先進国やMSFなど非政府組織機関の関わりについて、社会医学の観点から鋭い考察がなされています。

Part Iでみる、EVDのアウトブレイクが起こっていることの記述はとても生々しく、当時の現地の惨状が伝わってきます。読んでいて心臓の鼓動が早くなる内容です。エボラ出血熱と呼ばず、なぜ、Ebola viral disease, エボラウイルス病(EVD)と呼ぶのか、患者は実際どのような臨床像を呈するのか、米国感染症業界のジャイアントである、アントニー・ファウチ医師との友情、さらにはシエラレオネでEVDの対応で命を落とした医療従事者の話、臨床的に有効と思われる点滴などの支持療法の必要性とそれを実施する上での資源が限られた環境における障壁などが細かく記載されています。

このPart Iに感じた内容は、ファーマー医師はとても臨床家であるということです。様々な顔をお持ちなのは経歴からもわかりますが、それでもなお、とても臨床医であることをこの本から強く感じます。また、これほどシエラレオネの惨状の改善に貢献しているにも関わらず、いたる場面で彼の反省が記載されていることに、ファーマー医師の謙虚さとアウトカムに対する追求の強さを感じます。

Part IIはこの本の題名にもある、熱、諍い、ダイヤモンドの関係です。奴隷制、ダイヤモンドやその他の先進国で主に消費、使用される鉱物の発掘とそれに見合わない西アフリカの発展の乖離、戦争と臨床砂漠、「ケアよりの管理」の根源、搾取と抑圧を背景にした管理の台頭など歴史の闇が考察されています。

中でも私の興味を強くひいたものに「ケアより管理の概念」とパスツール派の台頭の話があります。歴史的にみると、この管理の概念は、入植者や植民地化を進めた側の安全の担保を基本に成り立たせるための対応であり、決して病に伏せた者に対する対応ではないのです。この差別的な哲学を起源にした管理は、現在の感染管理にもしばしば認められます。特にCOVID-19のパンデミックになってからそれは顕著です。

Part IIIは、この西アフリカのEVDの総括が書かれています。考えてみれば、なぜこれほどダイヤモンドが生産される地域で十分な医療の提供がないのでしょうか。どうしてこのように先進国から支援が入っても制圧がうまくいかないのでしょうか。この地域の従事する国内外の医療従事者に臨床的敗北、臨床のニヒリズムが、個人だけでなく、NGOなど全体にどのように伝播していくのでしょうか。EVDのウイルス疾患の特性もさることながら、これらの病理がアウトカムに直結しない結果をもたらしているであろうことが鋭く指摘されています。

ファーマー医師のこれまでの功績と忙しい中この書籍を訳された岩田先生のご尽力に感謝申し上げます。